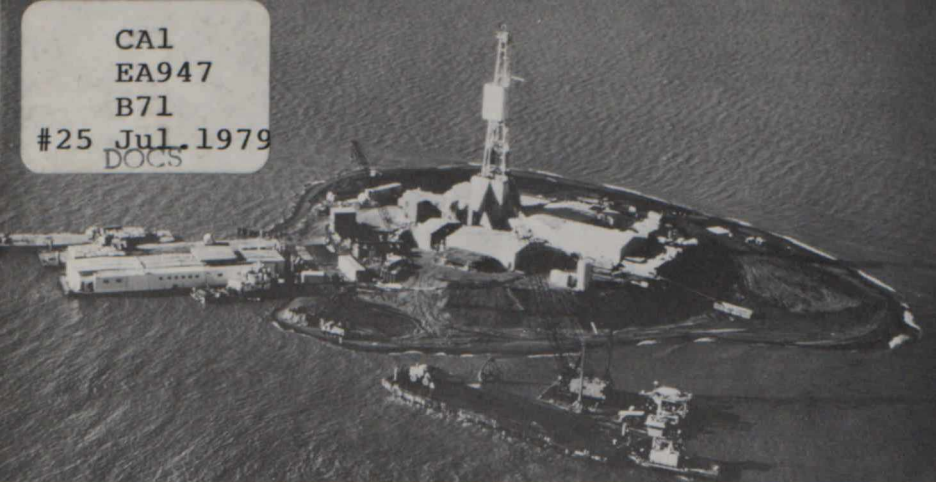


CAL
EA947
B71
#25 Jul. 1979
DOCS



カナダ

1979年7月
No.25

EXTERNAL AFFAIRS
 AFFAIRES EXTERIEURES
 OTTAWA
 AUG 29 1979
 LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

DOCS

トピックス — 2

カナダのエネルギー事情 — 4

クラーク首相、対米・太平洋関係を重視 — 8

カナダ、難民5万人を受入れ — 9

秋のカナダ旅行 — 10

日加国交50周年
「懸賞論文募集」によせて 小松 誠 — 13

エドモントン便り(1) 藤永 茂 — 14

書評 — 15

カナダ人の発明発見(1) — 16



メキシコから石油輸入 日量五十万バレル

カナダは、このほどメキシコとエネルギキ協定を結び、十年間にわたって最高日量十万バレルの石油を輸入することになった。実際の引渡しが始まるのは今年末から年初めになる予定で、一九八一年には最低五万バレル(日量)に達するという。

また、この協定(五月に調印)に基き、メキシコはその原子力発電計画の一環として、カナダのメインドゥ型原子炉の採用を検討する。メキシコ電力審議会が行なうこの検討作業には、カナダ原子力公社(AECIL)が協力する。その結果、メキシコがカナダから原子力技術または原子力機器を輸入することになれば、両国政府は、双方とも批准している非核拡散条約に基づいて、それらの非核拡散政策を適用することになる。

協定は、そのほか、①メキシコのウラン開発におけるカナダのウラン探査・採取・精練技術の適用を検討する②西部カナダの原料炭のメキシコ向け輸出を、五年間に三百万トンまたはそれ以上に増やすよう取りきめる③エネルギキ十節約および再生可能エネルギー十資源

の開発について共同作業の可能性を探る——などを定めている。

カナダは、イラン革命まで日量五十二万バレルの石油を輸入していたが、輸入が減つてからは、減少分を国内石油の増産によつて補つている。メキシコから日量十万吨が輸入されれば、イラン革命前におけるカナダの石油輸入需要の一九八一年をメキシコが供給することになる。

来春、ケベックで州民投票 主権・連合か、合衆維持か

ケベック州のルネ・レベック首相は、このほどケベックの「主権・連合」に関する州民投票を来春に行なう、と発表した。同首相によると、投票用紙に記載される質問は、州政府の選択すなわちカナダと経済的連携を保ちつつ、ケベック住民のすべての税金および立法権をとり戻すことに對して信任を求めめる内容になる。

ケベック州政府は、秋に州議会が再開する前に、主権・連合の意義を説明した白書を発表するという。レベック州首相の発言に對して、クランク首相は次のような談話を発表している——「レベック氏は州民投票をおおつていた」混乱のペーブルをいくらかとり除いてくれた。私としては、秋に州民投票

をやつて欲しかった。そうすれば、すでにケベックがあまりに長く耐えさせられてきた不安を、もつと早く解消できるはずだからである。ケベック住民は、来春、きわめて重要な問題に決定を下さなければならなくなつた。未だに不明確な選択と、一九八〇年代の状況に合った連那体制のいすれかをとらなければならなくなつたわけである。そのときになつて、ケベックの人々がカナダにとどまり、限りない可能性を彼らに与えるこの偉大ななる国で自分たちの将来を築くことを選ぶものと、私は確信している。」

カナダの原子炉 耐震設計に配慮

カナダが独自に開発した原子炉(メインドゥ炉)は、その安全性と高い稼働率で知られているが、はたして耐震性はあるのだろうか。カナダ原子力公社が発行している季刊誌「Magis」によると、耐震性のある原子炉の設計開発では力ナダは最先端を進んでいる国のひとつで、メインドゥ炉は建築基準法に明記されている地震よりも強い地震活動に耐え得るように設計されているという。以下、同誌からの抜粋。

カナダ国内におけるメインドゥ炉の建設には、オンタリオ州西南、ケベック、ニュー・ブランズウィックなどの、平坦で安定した沿岸地帯が選ばれてきた。国外に輸出される原子炉も、アルゼン

チンのコルドバ、韓国の蔚山といつた、地すべりや地形の大きなリスクが無に近い平坦で堅固な地域に建設されている。

しかしながら、電力に原子炉を必要とする工業諸国では、何百万もの人々が地震活動の激しい地域に住んでいる。日本のほとんど全部、米国やイタリヤの一部は大地震地帯だし、台湾では一日に三、四回も地震が起きている。

地殻が安定していない地域へ輸出されるメインドゥ炉は、極端な事態を考慮した特別な設計と開発が必要。そこで一九六六年、原子力公社は実際の地震活動をコンピュータ・シミュレーションによつて解析するいわゆるタインミツク・アナリシスを用いて、地震に耐える原子炉の設計にとりかかった。この新しい技法は、ケベックに建設されたジヤンテナ工一号炉の設計に初めて生かされた。

カナダのマイム劇団 九月に日本各地で公演

言葉ではなく、体の動きによつて物語を演じるマイム。カナダを代表するマイム劇団「シアター・ヒュムント・グレス」が、九月、国



際児童年と日加国交五〇周年を記念して来日する。

一行は、九月二十五日の東京国立演芸場、二十六、七両日の東京都児童会館での公演を皮切りに、横浜(神奈川県立青少年センター)、北九州(戸畑市民会館)、福岡(少年文化会館他)、金沢、魚津と各地を巡回、十一月の北海道(静内文化センター、苫小牧市民会館)、東京・板橋(城北高校)、池袋(池袋子ども劇場)での公演まで、およそ一カ月半にわたつてマイムを上演することになっている。演目は「ゆかいなホト一家」と五、六編の小品。

主催は日本児童演劇協会(東京都渋谷区神宮前六一九三三電話四〇九一一七九二)。

合成インシユリンの開発 カナダの学者が研究

豚、羊、牛などの膵臓から作られるインシユリンは、糖尿病の治療薬として欠かせないが、カナダの遺伝学者はこのインシユリンよりもっとすぐれた合成インシユリ

カナダのエネルギー事情

カナダは比較的豊富にエネルギー資源に恵まれているが、その分布は州や地域によって大きく異なる。したがって、長期にわたって満足し得るエネルギー供給の均衡を図るためには、いかなる方法で利益と負担を分担していくべきかという世界的な問題を、カナダも国内に抱えているわけである。カナダにおけるエネルギー消費量の上昇率は近年鈍化し、一九六〇年—一九七五年の年率五・一パー

セントから一九七七年には二・八パーセント、一九七八年には三・五パーセントへと下落した。しかし、一人当りのエネルギー消費量では、カナダは世界でも最高の部類に入る。一九七八年のカナダにおけるエネルギー消費額は二百二十億ドルで、国民総所得（GNP）の一〇パーセントに相当する。エネルギー消費量の一五パーセントは輸入原油であるが、エネルギー全体で見ると、カナダは純輸出

キャンドウ型原子炉の熱交換装置

国である。

エネルギー生産

一九七八年におけるカナダの通常原油および非常原油の生産高（原油換算）は、平均日産で百五十八万バレル。一九七七年と比べて、一・九パーセントの減少である。天然ガスの総生産量も、五・五パーセント減つて十九億立方フィートとなった。電力生産量は三千三百六十億キロワット時へ増えた。その内訳は、水力七〇パーセント、化石燃料二一パーセント、原子力九パーセントの割合であった。昨年のカナダのエネルギー総生産量は、九千六十兆B.T.U. 原油換算で、一億八千万バレルに相当する。

カナダの石油・天然ガスの確認埋蔵量は、大半が西部の堆積層盆地に存在している。主にアルバータ州だが、サスカチュワン州とプリティッシュユ・コロンビア州の一部にもまたがっている。天然ガスと通常原油が将来において有望視されているのは、辺境地域、すなわち北極地方とカナダ東岸沖である。特に有望視されているのは天然ガスであるが、大量の埋蔵量が発見されるとしても、それらを開発するには大変な困難と費用を伴うものと思われる。したがって、短期的な供給増加分は、主としてカナダ西部に求められることになろう。

通常原油のほか、カナダは特殊な石油資源を有しており、この方面における将来の可能性は大きい。その最大のもは、アサバスカ（アルバータ州）のオイルサ

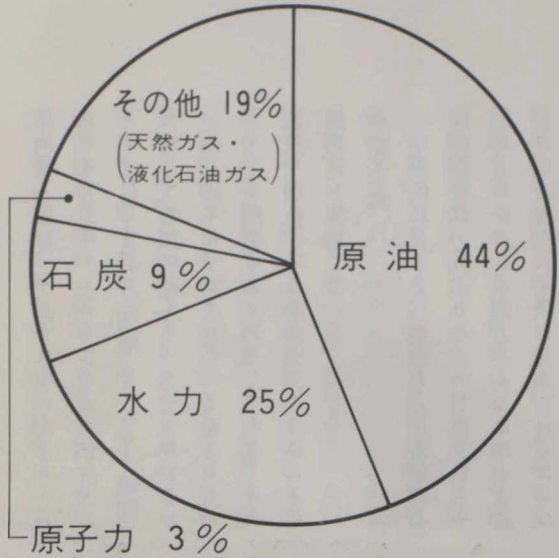
ンドで、推定総埋蔵量約千二百五十億立方メートル（約八千億バレル）は、世界でも屈指の石油資源である。しかしながら、実際にこれから採油を行うには相当な技術的困難を伴うだけでなく、開発コストも大きい。現在は、必要な技術開発に大規模に取り組んでいる段階である。少量の原油が現在すでに生産されているが、大規模な生産は、今後の開発に待たねばならない。

石油資源は、北極地方などカナダ各地に存在している。最近行われた埋蔵量評価によれば、西部カナダが全体の約九九パーセントを占め、残りはオンタリオ州と大西洋沿岸諸州にある。北極地方の石炭資源は、まだ正確な評価が行われていない。各沿岸の探査計画が現在実施されているが、中でもプリティッシュユ・コロンビア州北東部では活発な資源探査が行われている。

ウラン資源はカナダ各地で発見されているが、実際に生産が行われているのは、オンタリオ州とサスカチュワン州、それに北西準州だけである。最も豊富なのはヒューロン湖北岸近くのオンタリオ州エリオット・レイク地方で、ここは一九五〇年代初頭から採鉱が行われている。ウランの採鉱は、ここ数年著しく活発になり、ほぼ全部の州あるいは準州で探査が行われている。

カナダでは、電力供給源として、水力、石炭、石油、天然ガス、原子力と、いろいろなものが利用されている。カナダではほとんどあらゆる地域で水力資源が豊

カナダにおける
エネルギー消費の
内訳(1978年)



一九七八年にカナダで消費された一次エネルギーは、およそ八千六百兆BTUで、原油四四パーセント、水力二五パ

エネルギー消費

富であるが、州単位で見るとかなりの差がある。たとえば、ケベック、マニトバ、ブリティッシュ・コロンビア、ニューファンドランドの各州は、一九七七年の時点で、必要電力の九〇パーセント以上を水力発電によってまかなっている。反対にプリンス・エドワード島では、水力発電は全く開発されておらず、発電は一〇〇パーセント、石油を燃料とする火力発電である。アルバータとサスカチュワンも水力資源の乏しい州で、両州に豊富な炭化水素燃料（主に石炭と天然ガス）を使って火力発電を行っている。カナダで最大の電力消費地オンタリオ州では、水力三八パーセント、原子力二六パーセント、化石燃料三六パーセントという状況である。

パーセント、石炭九パーセント、原子力三パーセント余という割合であった。原油と液化天然ガスの消費量の上昇率は二・四パーセントに抑えられた。これは、一九七三年より七七年の上昇率五・三パーセントより低い。一人当りの電力の消費量は十三・四メガワット時であった。天然ガスの消費量はわずかに増えて、推定一日当たり一億二千二十万立方フィートとなった。石炭とコークスの消費量は三千五百万ショート(米)トンで、そのうち七三パーセントは発電に利用され、残りは大半が製鉄高炉用に使われた。

消費の地域別内訳は、オンタリオ州とケベック州が最大の消費地域で、合わせて全体の六二パーセント、次が平原諸州で一九パーセント、ブリティッシュ・コロンビア州と準州一パーセント、大西洋沿岸諸州八パーセントとなっている。

人口一人当りのエネルギー消費量は、気候や産業構造によって地方間の差が大きい。最大の消費地はアルバータ州で、同州の一人当りエネルギー消費量は最少消費地域の大西洋沿岸地域を七〇パーセント以上も上回っている。

地域によってエネルギー消費量が異なるだけでなく、消費するエネルギーの種類も異なる。たとえばカナダ随一の石油・天然ガス生産州であるアルバータ州では、一次エネルギー総消費量の五〇パーセントが天然ガスである。それに対し、アルバータのガス井から数千キロも離れている大西洋諸州では、天然ガスが市場に現われることは全くない。同地方のエネル

ギー源は、主に石油であり、エネルギー消費全体の七五パーセント強を石油が占めている。このようにカナダでは、地理的要因と資源状況に応じて、各地方はそれぞれ独自のエネルギー構造を形成してきた。大西洋沿岸諸州や北部のような地域では、主として石油に依存しており、ブリティッシュ・コロンビア、ケベック、マニトバなどの諸州は、水力発電への依存度が高い(これら各州では石油の消費量も大きい)。アルバータ州とサスカチュワン州では、全エネルギー需要の四分の三以上が石油と天然ガスであるが、石炭の消費量も比較的多い。オンタリオ州は、おそらくカナダで最もエネルギー消費の多様化が進んでいる地域で、その内訳は一九七七年現在、石油約四〇パーセント、天然ガス二三パーセント、石炭一五パーセント、水力発電一三パーセント、原子力発電九パーセントとなっている。ちなみに、同州は、原子力発電によって電力を供給している唯一の州である。

エネルギー事情と展望

原油、天然ガス、電力、石炭等、すべてのエネルギー源を合わせると、カナダ



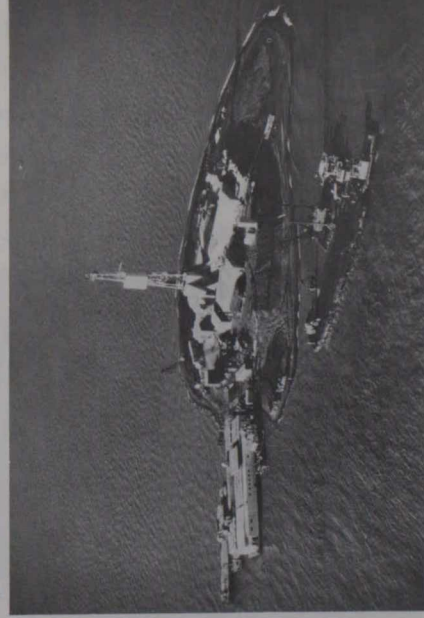
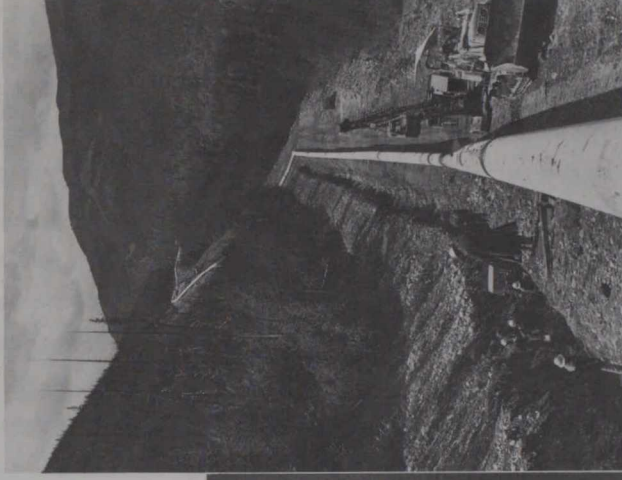
オイルサンドの採掘

はエネルギーの純輸出国である。しかし石油については、純輸入国となっている。一九七八年に、カナダは平均一日当たり六十万バレルの割合で石油を輸入している。その年におけるカナダの原油および石油製品の対外収支は、およそ十四億ドルの赤字であった。一九九〇年までにエネルギーの自立を達成する——というのがカナダの希望である。

短期的展望

一九七九年第一四半期の国内石油生産量は、日産二十万バレル増えた。前年同期に比べて一四パーセントの増産である。この増加分は、東部カナダのモンクトリオルに至る地域への追加供給と、米国から東部カナダへ輸出される石油と引き換えに米国西部へ送られる分に回された。その結果、第一四半期におけるカナダの

カナディアン・ロッキートを通じて産油地から消費地へ伸びるパイプライン。



北極・ポーフォート海の海底油田から採油するための人工島。

ト増えて、一九九〇年には約五千二百二十万キロワット時に達するものと思われる。

石炭とコークスの需要は、現在三千五百万米トン。毎年五・七パーセントほど増えて、一九九〇年には約六千八百万米トンの需要が見込まれている。カナダは豊富な石炭資源を蔵しているが、今後の開発には環境保護を考慮に入れた大々的な作業が必要となろう。

供給面では、カナダの通常原油以外の原油がどの程度開発されるか、ということが鍵となる。カナダの通常原油の保有量はここ数年減少傾向にあり、一九八〇年以後これらの油田から上る生産量は急速に減少していくものと予想されている。通常タイプ以外の原油(オイルサンド)に関しては、現在のところクレイト・カナディアン・オイルサンズ(GCOS)とシンクルードのプラントが唯一の確実な供給源である。これらのプラントの生産量は、一九八五年まで日産二万九千立方メートル(十八万バレル)の範囲にとどまるとみられている。そのほかには、GCOSとシンクルードのプラントの拡張、また、コールド・レークにおける第三のオイルサンド採鉱所と油層内採油所の建設、ロイドミンスター・タイプの重質油を予備精製する施設の建設などが期待されている。このようにいくつかの開発が進めば、一九八五年までにはさらに日産三万立方メートル(十八

質油、軽質化重質油の可能生産量は、NEBの最低基準で、今年の推定量百八十万バレルをはるかに下回る日産十三万バレルと予測されている。NEBの予測にしたがえば、石油の輸入量は一九七九年の一日当たり約三十万バレルから、一九八五年には七十万バレルへ大幅に増加することになる。

しかし、それでも、カナダは一九八五年までに石油の輸入量をエネルギー需要の三分の一以下に減らすというIEAへの約束を果たすことができるだろう。石油価格の高騰および非石油エネルギー資源の開発推進により、需要の上昇率は下るはずである。国内石油の供給については、通常石油の生産が徐々に減っており、沿岸海底および北極地域における探査・開発、重質油やオイルサンド開発の推進、確認済み原油に対する回収技術の向上などを通して、その分を補う必要がある。カナダのエネルギー事情を一変するはずであろうこうしたもろもろの開発は、莫大な資本を要する。

天然ガスの需要は、現在、一兆六千億立方フィートであるが、一九九〇年までには二兆三千億立方フィートに達するものと思われる。NEBの予測によると、国内生産でこの需要を満たし、さらに十兆五千億立方フィートにのぼる一九九五年までの既輸出契約だけでなく、追加輸出および国内における大幅な需要増加をまかなうことができるという。

電力の需要は、現在の三千百六十万キロワット時から、毎年およそ四・三パーセン

原油輸入量は、予測されていたより一日当たり七万五千バレルも少なく済んだ。カナダは、IEA(国際エネルギー機関)に対して石油の輸入を一九七九年および一九八〇年に予測されている量より五パーセント削減すると約束しており、その約束を履行するための強力なエネルギー節約策を実施している。

中期予測

中期的に見ると、原油および非通常石油の需要は一九七九年の一日当たり百八十万バレルから二百四万バレルに増えることが、一九七八年秋に発表されたエネルギー庁(NEB)報告によって予測されている。軽質油、凝質油、合成原油、重

オンタリオ州コールド・レークでのウラン採鉱。



目標をほぼ達成することができそうである。一九八五年以後の見通しについては、オイルサンド等の生産が順調に拡大されて需要の伸びと通常石油の生産減をカバーできるかどうかによって、異なった様相をもってくる。一九八五年以降の数字については推定の域を出ないが、輸入依存量がほぼ日量十二万八千方米の水準に保たれるものと見られる。

再生可能のエネルギー源

一九七七年、エネルギー・鉱山・資源省の一部門として、再生可能エネルギー資源局が設置され、連邦政府のためにこの分野の政策、計画、一般情報の推進を担当することになった。連邦政府は、これまで主に太陽エネルギーやバイオマス、エネルギー、風力エネルギーの研究、開発、実証に力を入れてきた。研究開発費も過去三年間に急速に増大し、現在は全体で約千四百万ドルに上っている。

一九七八年七月に、太陽と森林と都市廃棄物から得られるエネルギーの利用を促進するため、連邦政府は向こう五年間に総額三億八千万ドルを支出する、と表明した。ソーラー(太陽熱利用)計画の目標は、カナダで独立採算のソーラー産業を興すことにある。この目標達成のために、新しく建てる連邦政府の建物には国産の太陽熱利用暖房装置や温水装置を優先的に購入し、一九七九年から一九八四年の五年間に一億二千五百万ドルが投入される予定である。そのほか、ソーラー機器部品の設計、試験、生産を行うカナダ企業を援助するため、連邦政府はソー

ラー機器の優秀な設計案(最高二十五件)に対し一件一万ドルの奨励金を企業に与え、またとくに太陽熱暖房機器の設計開発についてはカナダ企業に対し、一件二十万ドルから三十万ドルに上る奨励金を最高十件まで与える計画である。

次にバイオマス(生物転換エネルギー)利用計画であるが、この目標は、国の一次エネルギー総供給量に占める木材および都市廃棄物の割合を、一九八五年までに倍増し、七パーセントとすることである。増加分の大半は、製材所における木材廃棄物から発生するエネルギーである。連邦の補助金は総額一億四千三百万ドル。木材廃棄物のエネルギーを利用する一定種類の装置を

林産企業が設置する場合、そのコストの二〇パーセントを補うために使われることになる。そのほか、バイオマスをエネルギー源とする発電設備に対しても、総額一億五千万ドルの融資が連邦政府により保証される予定である。

以上の計画のほか

に、研究、開発、実証のための援助費も増額される見通しだ。再生可能エネルギーおよび省エネルギーの分野において、連邦政府が州や民間との共同出資金としてこれまですでに計上した金額は、一億千四百万ドルにのぼる。

省エネルギー

国民一人当りのエネルギー消費量でいえば、カナダは、世界一でないにしても、世界最高の部類に入る。エネルギーの浪

費を排除することは、カナダにとって最優先課題である。エネルギーを節約すれば、コストのかかるオイルサンド・プラントや原子力その他の発電所を新設する必要が少なくてすむからである。

次に、連邦政府がとっている主な省エネルギー奨励策をあげよう。

(I) 総額十四億ドルの家屋断熱化援助計画

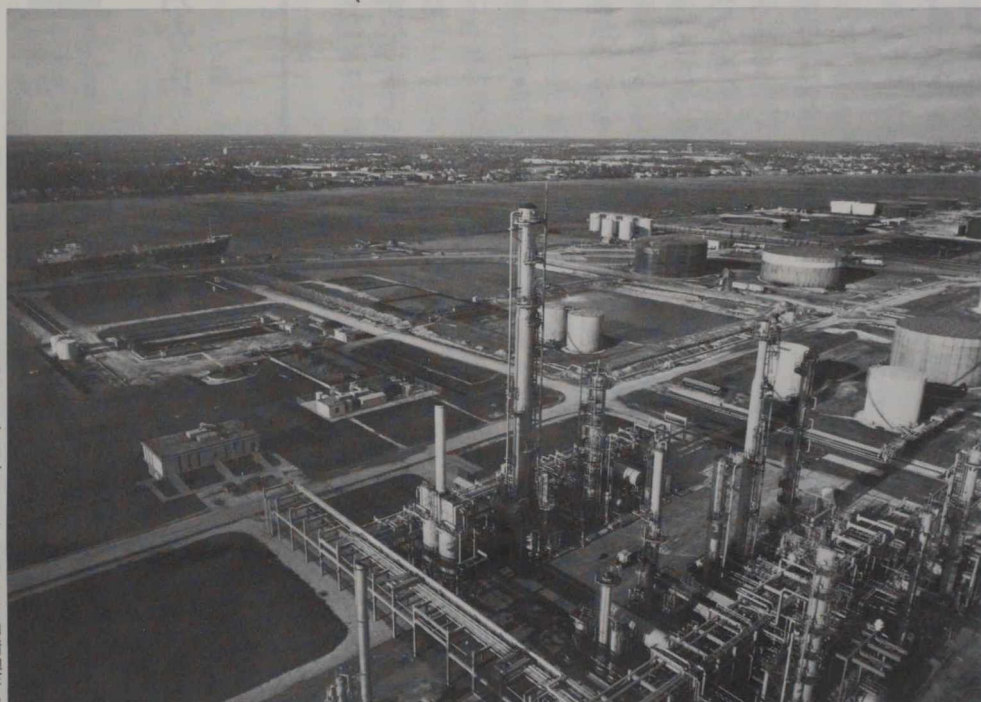
(II) 一九八〇年型と一九八五年型の新車に対する平均性能基準の設定。これが実施されれば、一九八五年のガソリン消費量は、自動車の総台数が増えるとしても、一九七六年時の水準を下回ることになろう。

(III) 自動車用クーラーに対する百ドルの付加税

(IV) 一〇パーセントのガソリン消費税
(V) 新設家屋に対する建築基準法による断熱基準の制定。断熱基準については、現在、州政府が検討中である。

以上が、連邦政府による省エネルギー政策の中心的内容である。連邦政府だけでなく、州政府や産業界、大学も、国のエネルギー目標を達成するため諸々の計画を実行している。州の計画は、州独自のニーズを満たすためのもので、中には連邦政府や民間企業と共同のプロジェクトもある。いずれもエネルギー自立を達成しようとするカナダの努力の一環をなすものである。

(編注・カナダのエネルギー政策は、クラーク政権の誕生により、近いうち、若干修正されるものと予想される。)



オンタリオ州サーニアにある石油精製所。



大平首相と握手するクラーク首相。左はマクドナルド外相。

対米・太平洋関係を重視

ケベック問題は二二七、八カ月が山

クラーク首相

六月末東京で開かれた第五回主要先進国首脳会議（東京サミット）に出席したクラーク首相は、会議のあと、トロント・スター紙の記者と六月四日の就任後、初めての単独会見に応じ、サミットの成果および今後の諸政策について述べた。会見の主な内容は次の通り。

記者（リチャード・グイン氏） サミットの一般的印象は、首相は非常にうまくやった、驚くほど立派にやりこなした、ということのようだが、首相自身も驚いているか。

クラーク首相 いや、私は驚いてない。第一日目の朝食のとき、カーター大統領、ジスカールデスタン大統領、シュミット首相らと、わずかの間意識していたが、やがて皆がナイフとフォークを使って卵を切り始め、会話が始まり、朝食が終わると、私もその場の感じがつかめてきた。そのあとは、要するに会議だ。私の人生は会議の連続だったからね。

記者 ところで、選挙公約のうち、ぜひやりとげたい、と考えているのはどれか。

首相 いくつかの公約は、選挙民がわれわれに与えた信託に関わる基本的なもの

のだ。不動産減税などがそれに当る。他の公約についても、首相に就任して以来、実行できないものはないことが分っている。もちろん、中には、支持者の方々が期待していたほど早急には実施されないものもあるが。

記者 クロスビー蔵相は、カナダと米国の間の自由貿易の可能性について全国的な討論を望む、と述べている。蔵相は、また（カナダの対米依存を減らすという）第三の選択はうまくいっていない、とも言っている。これは首相の政策（を代弁したもの）か。

首相 そうだ。（米国との）自由貿易はひとつの考えだ。クロスビー蔵相は、自由貿易はオブションだと言ったのだ。全国的な討論は、まず政府による調査から始めたい。（自由貿易が実現するとすれば）米加自動車協定のような形での部門別のアプローチをとるのではないか。

第三の選択はうまくいっていないとクロスビー蔵相が言っているのは、カナダの対米依存を抑えようとしたこの政策が採択されて以来、対米依存はかえって増大している、ということだ。

記者 サミットでは、西独、フランス、

英国、イタリアという欧州四カ国と、他の三カ国——すなわちカナダ、米国、日本——の間に亀裂（敵対ではない）があったという印象を強く受けた。そういう不一致を首相も感じたか。また、北アメリカ、オセアニア、東南アジア、日本を網羅した環太平洋共同体の話があるようだが、この構想を進めていくつもりか。

首相 環太平洋共同体の構想は検討しているが、これはまだ漠然としたものだ。（ヨーロッパ四国と他の三国間に）不一致は確かにあった。双方の態度には、明瞭な違いがあった。私が、初めのあいさつの中で、カナダは日本の隣国だと意図的に言ったのは、そのためだ。

第三の選択は、ヨーロッパに向けていた。私が進めていきたいことのひとつは、太平洋地域との貿易の推進だ。カナダ国内では、事業資金の大半がアルバート州やブリティッシュ・コロンビア州

サミット東京宣言

（カナダに関する部分）

カナダ、日本及び米国は、それぞれが国際エネルギー機関（IEA）において一九七九年について誓約した調整済み輸入水準を実現し、また一九八〇年の輸入をこの一九七九年の水準より高くない水準に維持し、これを監視するであろう。（一九八五年の石油輸入の上限目標について）

現在から一九八五年までの期間、カナダの石油生産は極端に減少するであろうが、石油消費の年間平均成長率をパーセントに抑え、その結果として、一九八五年までに一日当たり五万バレル分石油輸入を減少させる。従って、カナダの輸入目標値は、一日当たり六十万バレルとなる。

といった西部へ移動している。（その結果）、太平洋地域について何らかの知識をもっている新しい事業者が沢山でてきた。彼らの視点は、東部のカナダ人の視点とは異なっている。

記者 エネルギー問題はサミットを独占したが、首相はカナダ国民にどういう生活様式の変更を求めるつもりか。

首相 OECDやサミットでなされたことは、きわめて大事だ。しかし、国民に事態の深刻さを認識してもらうには、国内の石油生産が減少するというエネルギー庁の報告にもっと焦点を当てることだ。われわれの問題は、カナダにはいつまでも石油がある、石油問題はどこかよその国の問題だという心理があることだ。

記者 ケベック問題だが、レベック州首相はすでに州民投票で敗北した、という見方がある。首相もそう思うか。

首相 いや、まだそうは思わない。彼はまだ敗北していない。しかし、連邦主義者が知性をもってやれば、彼は敗北するだろう。今後六、七カ月は、きわめて重要だ。

記者 それはなぜか。頭をかかめて、何もしない方がいいのではないか。そうすれば、レベック首相には攻撃する目標がなくなる。

首相 州民投票は選挙みたいなもの。十票ほど負けていると想定して選挙戦を進めないと、本当に負けてしまう危険がある。勝てる者でも、努力しなければ勝てない。

（トロント・スター紙より転載）

米 国	169,000	フランス	5,000
カナダ	50,000	ベルギー	2,964
オーストラリア	15,000	ニュージーランド	2,287
英 国	10,000	スウェーデン	1,987
西 独	6,300	スイス	1,323



カナダに着いた難民の一家。(写真 Sentinelle)

官民で難民5万人を受け入れ

カナダ、救済基金も創設

カナダ政府は深刻なインドシナ難民問題に対処するため、六月に今年の受け入れ枠を五千人から八千人（民間の分を含めると一万二千人）に拡大したのに続いて、七月には来年末までに政府と民間で五万人を受け入れると発表した。民間では、これに呼応して、赤十字が難民救援のために目標五十万ドルの募金を開始し、オンタリオ州のデービス首相が赤十字の募金額と同額の金を寄付すると約束したほか、ケベック州、モントリオール市、オタワ市、バンクーバー市や教会などの民間機

関が難民の受け入れを表明している。カナダ赤十字ではすでに五十万ドル、開発と平和のためのカナダ・カトリック教団も二万五千ドルを難民救済に拠出している。カナダ政府が昨年末に発表した難民再定住化計画によると、今年の世界中からの受け入れ枠は一万人で、そのうち五千人が東南アジアからの難民に割り当てられていた。また二千人は緊急の場合に備えて別枠にとってあった。

ところが難民問題が今年に入って悪化したため、政府はこの二千人をインドシナ難民に振り向け、さらに一千人を追加して、政府の受け入れ分を八千人に増やした。教会など民間が収容する二千人（予想）すでにカナダに定住しているベトナム人が難民キャンプから呼び寄せる家族千人（同）、ベトナムから呼び寄せる家族千人（同）を合わせると、一万二千人になる。七月の発表によると、これまでの月平均千人が八月より平均三千人に増やされ、来年末までに五万人を受け入れることになった。民間の受け入れ一人につき、政府が一人を受け入れる、という。カナダは、一九七五年から昨年末までに九千九人のインドシナ難民を収容しているの、来年末までの受け入れ総数はおよそ六万人となる。

毎月三千人をカナダに輸送するための飛行機は、今年末の分まですでに手配済み。来年の分についても、準備を進めている。また東南アジアには、カナダへ向かう難民の事務手続きをするためのスタッフを配しているほか、カナダへ到着した難

難民の中にはこういう幼児もいる。抱いているのはカナダ軍将校。(写真 Sentinelle)



民を迎えるための仮収容センターをエドモントンとモントリオールに設置している。難民は、一時収容所で二日ないし七日間滞在したあと、カナダ各地の定住地へ送られるわけである。

いろいろな宗教団体や市民団体でも多数の難民受け入れを表明しているが、民間の受け入れ計画（スポンサーシップ・プログラム）には直接参加できないものの、救援に関心のある人々のために、連邦政府はカナダ難民基金を創設することになっている。国民一般からこの基金に寄付を募り、難民の輸送とカナダでの再出発のための資金にあてるという。

カナダ政府は、また、国連難民高等弁務官事務所の役割を強く支持し、昨年末、その年間分拠金を二倍に増やしたほか、今年の四月には特にインドシナ難民の移住援助金として七十万ドル追加した。七月にジュネーブで開かれた難民会議では、マクドナルド外相がさらに五十万ドルの上乗せを発表している。

マクドナルド外相は、この会議の席上、「わが国は、これほど多くの人々が彼ら自身の政府の措置によって受けた苦難を緩



カナダでくつろぐ難民の家族。(写真 The Citizen)

和するため、最善の努力をするつもりだし、またそうしたいと思っている。他の国々も国民の慈悲により同じような努力をしていただきたい」と語っている。

同外相は、同時に、難民の大量流出の原因になっている国々を難民問題の元凶と決めつけ、「この非道で残酷な人権侵害」をやめるよう次のように訴えた。「これらの政府には、その市民の出国が安全かつ秩序ある方法で、またいかなる種類の脅しや罰なしに行なわれるようにする最大の責任がある。国際社会は、いかなる民族グループをもしくはいかなる社会的経済的グループをも追放または排除しようという試みを、人権の不当な侵害として拒絶する。難民の流出国がこうした人道的かつ正当な要求に応じてはじめて、問題の解決は可能となる。」

燃えあがる紅葉

感動的な秋のカナダ旅行

キコキコ、カッタ、キコキコ、カッタ……長い木の腕は前後に動き、みごとに布が織られてゆく。隣りでは、レースの帽子をかぶり、十八世紀当時そのままにロングドレスを着たおばさんが、大きな刺しゅうに取り組んでいる。古びたパン屋をのぞくと、職人が開拓時代そのままにパン粉をていねいに練りあげ、レンガ作りのオーブンでパンを焼いている。広場では二頭の馬が馬車を引き、脱穀機が稲の穂を巻き上げている。ここカナダ東部、オタワ近郊のアッパ・カナダ・ビレッジは旅人をタイムマシンに乗せ、十八世紀の開拓時代に連れ戻してくれる。

カナダ東部の紅葉は、九月中旬から十月中旬に最盛期をむかえる。野山は燃えんばかりの真紅に埋まり、日本の秋とはまた異なった鮮烈な紅葉を満喫することができる。カナダの秋は日本ほど長くなく、短い秋を惜しんで、すべての自然がいつせいに变化する。激しく、凝縮されたカナダの秋は、旅人の胸に強烈な感動を呼び起こさずにはいないだろう。

カナダ東部の燃えるような紅葉の中、カナダのルーツを探る旅に出発してみたいかが……。秋のカナダの見どころを紹介しよう。

ヘリテッジ・ハイウェイ（開拓者達の道）をたどって——四百年以上の歴史を有するカナダのルーツをたどるには、ナイアガラを基点としてオンタリオ湖を北上し、トロント経由でキングストンからセントローレンス川沿いにモントリオール、ケベックに至るヘリテッジ・ハイウェイが最上のコースだ。

ヘナイアガラ

エリー湖とオンタリオ湖をつなぐナイアガラ川。それに沿って走る全長五十八キロのナイアガラ・パークウェイには、壮大なナイアガラの瀑布を含め、数々の

史跡、公園、博物館、ピクニック場がある。

● オールド・フォート・エリー

ナイアガラ川の上流エリー湖の近くに位置し、一八二二年〜一八一四年の米国との戦争中に建てられた要塞。呼び物は兵器博物館と当時の制服そのままの衛兵。夏季のみではあるが、毎日衛兵の演習を見ることが出来る。五月一日〜十月三十一日の午前十時〜午後六時までオープン。

● グリーンハウス

ホース・シュー境から南へ一キロ弱のところであり、一年中さまざまな花が咲きみだれている。秋には菊とシクラメンの特別展示会もある。入場料は無料。

● ショー・フェスティバル

一七八一年に作られた歴史的な町、ナイアガラ・オン・ザ・レイクでは、バーナード・ショー

ザ・レイクで開かれる。

● ワイン祭り（セント・キャサリン）

ナイアガラ瀑布とトロントを結ぶクイーーン・エリザベス・ウェイを約二十キロ走ると、セント・キャサリンの町に入る。ここは、オンタリオの果樹園と呼ばれる地域の中心地。毎年九月後半の十日間、ぶどうの収穫を祝い、ナイアガラぶどう・ワイン祭りが盛大に開催される。大パレードに始まり、ぶどうの女王が選ばれ、舞踏会が華やかにくりひろげられる。中でも特に観光客の人気を呼ぶのが恒例のワイン試飲会だ。この期間中（今年は九月二十一日〜三十日）には七万トンにのぼるワインの収穫風景やワイン製造の過程が見学できるバスツアーもある。団体の場合はガイド付きだが、予約が必要。

● ババリア風オクトーバーフェスト（キッチナー）

クイーーン・エリザベス・ハイウェイをハミルトンで降り、西へ九十キロのところにあるキッチナーは、ドイツ系カナダ人の中心地。大のビール党であるドイツ人の伝統を受けついだババリア風オクトーバーフェストが、毎年十月中旬の九日間にわたり開催される。市内二十カ所以上のピヤホールやピヤテントの陽気なドンチャン騒ぎは最高に楽しい。今年の日程は十月五日〜十三日。

● 農村で味わうのんびりカナダ

刈り取られたばかりの乾草のにおり。



セント・キャサリンのぶどう・ワイン祭り

バーナード・ショーや彼と同時代の作家の作品、著名な新しい作品などが上演される。公演は六月中旬から九月初旬まで行なわれる。このフェスティバルと併行して、コンサート・シリーズとカナデアン・マイム・シアターの公演がナイアガラ・オン・

カナダ議会議事堂(オタワ)での衛兵交代の様様。



新鮮な空気の中でもりもりと湧く食欲。ピクニックをしたり、釣りをしたり、森の奥深くわけ入って小さな冒険をしたり、楽しさがいっぱい。カナダの家庭に自然にとけ込むこのユニークなツアーへの参加は、オンタリオ州南部各地で可能。料金は一週間で食事を含んで百ドル前後と格安。子供づれでももちろんOK。

へトロント近郊

オンタリオ州の中心地として発展したトロントは、今やカナダ第二の都市であり、日系カナダ人が一番多いこともあって日本人に最も親しみやすいところ。トロントを基点とした見どころをあげてみると……。

●百年前をそのままに、ブラック・クリーク・パイオニア・ビレッジ
中心地から車で北北西に三十分、ジーン通りのステイールズ街にあり、

百年前のオンタリオの小さな村落をつくりそのまま再現している。もともとここに建っていた五軒の開拓者達の丸太小屋を中心とした、印刷屋、かじ屋、靴屋などでは、人々が百年前そのままの服装で仕事についている。四月から十月は月曜と金曜の午前九時三十分より午後五時、週末と休日は、午前十時より午後六時。

●マスコーカ地方の紅葉祭り

トロントから北百六十キロのマスコーカは、無数の湖と小川のある夏のリゾート地として有名な所だが、この地方の紅葉が湖面や小川のせせらぎに映える風景はまた格別の趣きがある。毎年九月十五日から十月十五日までの一カ月間、「マスコーカ・カバルケード・オブ・カラー」と呼ばれる紅葉祭りが催されることは、意外に知られていない。ピクニック、カメラ持参のツアー、七面鳥デイナー、パレード、ダンス……とお祭りは華やかに続く。

●紅葉列車
トロントから北西に約七百キロのアガワ・キャニヨンの紅葉は、カナダでも一、二を争うすばらしさ。アルゴマ・セントラル鉄道が毎日一往復、スー・

サンマリーを朝八時に出発、紅葉の山々をぬって正午にアガワ・キャニオンに到着。写真をとったり、岩登りをしたり、たっぷり楽しめる。ただし、週末には、のんびり秋の一日を味わおうという観光客でいっぱいになる。食堂車もついている。

トロントからの紅葉見物のパッケージは多数出ている。

へキングストン

トロントから北東に百五十六キロ、オンタリオ湖がセントローレンス川にそそ

ぎこむ地点に一六七三年に設立された、オンタリオ州最古の町キングストン。その西端、セントローレンス川に面して、キングストン砦が見える。ケベック以西では最強を誇っていたというこの砦では、当時の英国軍の軍服を着た衛兵が十九世紀さながらに演習を再現して見せる。七月と八月に一般公開される。

●アッパー・カナダ・ビレッジ
キングストンからヘリテージ・ハイ

18世紀当時そのままに再現された医者の家。(アッパー・カナダ・ビレッジ)



ウェイを北東に約百三十キロ。モリスバーグ近郊にあり、百年以上昔の王党派(ロイヤリスト)の村落と生活が再現されている。パン屋のおばさん、水車小屋のおじさん、教会の神父さん……当時そのままの生活を営んでいる人々に話しかけてみよう。おとぎ話の世界さながらに、いつしかカナダの心ふるさたと触れた感動があふれる。五月中旬から九月下旬までオープンしている。

● サウザンド・アイ
ランス・クルーズ
オンタリオ湖に
始まるセントロー
レンス川の河口に
は、千余の小島が
浮かんでいる。深
いワルイの大河に
浮かぶ島々には豪
華な別荘が建ち、
ヨット、モーター
ボート、カヌー、
キャンプ場と水上
スホーツのパラグ
イスである。カナ
ダ領の島とアメリカ領の島を結び、世
界で一番短い国境の橋があったり、大
富豪が愛する妻の為に建てたという壮
大な石造りのお城があったり、まさに
インディアンの名付けた“偉大なる魂
の庭園”にふさわしい水上公園だ。

《モントリオール近郊》

一五三五年、ジャック・カルチエが発見・命名したモントリオールは、フランス系カナダ人の中心地であると同時に、カナダ最大の都市でもある。またパリに次ぐ世界第二のフランス語都市としても有名。オールド・フォート、オールド・モントリオール、マウンテンビュー、命名したモントリオールは、フランス系カナダ人の中心地であると同時に、カナダ最大の都市でもある。またパリに次ぐ世界第二のフランス語都市としても有名。オールド・フォート、オールド・モントリオール、マウンテンビュー、



紅葉の山道で乗馬を楽しむ人々(ケベック)。

● ローレンシアン
の歴史に触れる
フランス系カナダ
人を見学する。西はロッキーマウンテン脈
から、南はメキシコ湾におよんだニュー
フランスの基地として栄えた同市は、北
米唯一の城壁で囲まれた都会だ。四十万
の人口は九二パーセントがフランス語を
に話す。モン
トリオールの北西
へ十五号線を車で
一時間、四季を通
じての大リゾート
地である。世界最
古の山脈、氷河が残した無数の湖と川、
秋ともなれば緋色、黄色の紅葉がさま
ざまの模様を描き、パステル画を見る
ばかり。インディアン・サマーの暖か
い陽ざしは戸外スポーツの天国となり、
紅葉の中で楽しむ乗馬、釣り、ピクニ
ック、ゴルフ、テニス等も格別だ。ゴ
ルフ、テニスは十月中旬まで楽しめる。
南北に八十キロ、東西に百四十五キロ
に広がるローレンシアンには、百五十
以上のリゾートがある。宿泊施設も
安価なペンションから豪華なホテルま
で幅広い。モントリオールのホワイア
ジャイ・バス・ターミナルからローレ
ンシヤンの各リゾートへは、バスも出
ている。

《ケベック》

サミュエル・ド・シャントアレシが一六〇



ケベック市の全景

● ケベック要塞
めがらした中には二十五の建物があり、
博物館になっているのはかつての火薬
庫。伝統的な衛兵の交代式は、五月中
に面した小さな教会。一六八八年に建
てられ、一六九〇年にイギリス軍を打ち
破った戦争を記念してこの名がつけら
れた。ケベック市にはこの他にも、フ
ランス系カナダ人の精神的支えとなっ
てきた教会が多数あるので、教会めぐ
りをして、ケベック人の一面をうか
がることができる。

● シヤトール・フロンテック・ホテル
から、午前八時午後八時までオープン。
まで、午前八時午後八時までオープン。
ダラム広場にそびえる古城のように
荘麗なホテル。一七八四年、ホルデ
イアード総督によって建てられたシヤ
トール・ホルディヤンズの跡地に、一
八九二年完成した。
● シヤンフラン記念像
シヤトール・フロンテック・ホテル
の横の広場には、ケベックの生みの親
サミュエル・ド・シャントアレシを記念
した像が建っている。
● ノートルダム・ド・ピクトリア寺院
ロヴァー・タウンのロワイヤル広場
に面した小さな教会。一六八八年に建
てられ、一六九〇年にイギリス軍を打ち
破った戦争を記念してこの名がつけら
れた。ケベック市にはこの他にも、フ
ランス系カナダ人の精神的支えとなっ
てきた教会が多数あるので、教会めぐ
りをして、ケベック人の一面をうか
がることができる。

(カナダ観光局提供)

日加修交五〇周年記念

懸賞論文募集によせて

日加協会運営委員長

小松 誠



「日本とカナダの橋渡しになるような仕事を」と、お訪ね下さる方が、最近とみに増えてきている。

日加両国が正式に外交関係を樹立してから、今年はずうと五〇周年に当る。

この間の、両国間の諸般の關係は、既刊の本紙日加国交五〇周年特別号に、興味深く、いろいろの角度から紹介されている。

両国間のかけ橋になった先達は、公人、民間人を問わず、それぞれの立場と能力

で、今日の盛んな日加関係を築く礎石となってきたのであるが、現在もなお、多くの人が両国間の理解と発展のために献身しようとしている。

これは、とりもなおさず、お互いの間に、十分な理解と認識が不足していることの証拠であると共に、今後さらにあらゆる面で、緊密な結びつきが出来、相互依存の關係が深まることを意味するものと考えられる。

集を実施している。

その目的は、あくまで国民一般に、あらためて日加關係に注目を集め、まだまだ知られていないカナダを知って頂き、相互依存度の高い両国間の關係に認識を深めて頂くことにある。論文と言っても、必ずしも高度な学問的研究を要求するものではないことは、もちろんである。

したがって、中学、高校生から、一般社会人まで、性別を問わず、それぞれの立場と関心をもって、課題にとり組んで頂きたいと願っている。外国人からの応募も自由であるが、論文記述は日本語に限られる。

課題の(1)は、日加關係の展望と、建設的な提案を主題とし、各分野で活躍しておられる一般社会人からの応募が期待される。多分に、政治、経済、社会、文化をはじめ、各方面にわたる、具体的示唆に富んだ論作が集まるものと思われるが、論文原稿の枚数制限があるので、要領よくまとめるのも肝要な条件となろう。

課題の(2)は個人的経験や知識をもとにしたものであるから、内容は千差万別であらゆる階層の人々から多数の応募が期待されるが、それだけに密度の高い作品が選ばれることになろう。

応募は、いずれの課題をとってもよく、また両方に応募してもさし支えない。入賞者、佳作入選者は、十月下旬から十一月頃に予定している「日加修交五〇周年記念懸賞論文発表会」で表彰され、その作品は、本紙その他の刊行物に掲載発表される予定である。

日加協会が、外務省及び在日カナダ大使館の後援を得て、この懸賞論文の募集を企画したところ、カナダ太平洋航空他会員企業多数の協賛を得、関係者は非常に勇気づけられている。

協会も一昨年、創立二十五周年を祝い、以来鋭意会員の拡充と共に、有意義な運営を企図しているところで、この論文募集計画も協会活動の重要行事として、多大な成果を期待している。

進んで日加両国のかげ橋になろうと、あらゆる面で献身を惜しまない多くの方々と共に、協会も表裏一体となって、更に深い相互理解と、友好親善のために努力をし、活動の輪をひろげてゆきたいものと考えている。

読者の皆様、奮ってご応募下さると共に、知友の方々に呼びかけて、一人でも多くの方にこのエッセイ・コンテストを知って頂ければ幸いです。

大使館案内

当大使館には、次の資料にまだ残部があるので、希望者はハガキで請求された。いずれも無料。

小冊子「近代カナダの歩み」

背景説明レポート No.3「カナダの政党」、No.5「カナダ経済の見通し」、No.6「カナダ連邦主義とケベック」、No.7「カナダ経済」、No.8「多様文化の国カナダ」、No.9「カナダ経済の現況」

広報紙「カナダ」日系カナダ人特集、カナダ文学特集、カナダと日本特集、国交五〇周年特集、クラック首相・サミット特集。

応募要項

- 課題 (1) これからの日加關係
(2) 私とカナダ
- 枚数 400字詰原稿用紙15枚以内
- 締切 昭和54年9月15日
- 賞 入賞 2名
賞金 各20万円(税込み)
副賞 東京・カナダ往復航空券(モントリオールまで)
- 佳作 5名
賞金 各5万円(税込み)
副賞 協賛各社の賞品
- 宛先 〒100 東京都千代田区永田町
2-17-3 堤フラッツ 201号
日加協会「懸賞論文」係
(電) 03-581-0925・1694

この機会に、日加協会は、国交五〇周年を記念して、日加關係に対する関心を一段とたかめ、日加両国民の相互理解を促進するために、広く一般から懸賞論文の募

エドモントン便り(1)

『青い空』

アルバータ大学教授 藤永 茂

「空が青いですねえ」

福岡からエドモントンにやって来て間もないSさんにそう言われて、私は初夏のエドモントンの空の青さを今更のように仰いだのだったが、それからしばらくしてイタリヤの大学都市ピサからエドモントンに着いたM教授の奥さんにこの土地の第一印象を求めたところ、「空が美しい」という答えがすぐに返ってきたのには、

すっかり考えこまされた。

エドモントンは、カナダのアルバータ州の首都で、北緯五十四度(樺太の北端あたり)に位置する人口約五十万の都市である。市の東部には石油の精製工場が並び立ち、自動車の数も北米の五十万人都市としては最高に近いと思われるが、それでもエドモントンの空がその青さを

失わないのは、このカナダという国の大きさのおかげである。アルバータ州だけでも、面積で日本の二倍に近く、人口は約五十分の一である。隣人愛を説く宗教に帰依しているはずの人たちの国ならば、こうまで欲張って広い土地を占めなくとも……と私は思うのだが、まあ今は話を

「青い空」にもとすことにしよう。

カナダ西部にあるアルバータ、サスカ

チュワン、マニトバの三州はプレーリー・プロビンス(Prairie Provinces)と呼ばれる。プレーリーはもともと大草原を意味する。このカナダ西部の大草原は、太古の昔からバッファロー(アメリカ野牛)と原住民(いわゆるインディアン)たちのものであった。大草原の上には、ただひたすらに深く広い大空だけがあつたに違いない。

現在では、この三州の大草原は世界で最も豊かなパンかごの一つに変わっている。見渡す限りの黄金の麦の穂波や黄色の菜種(こちらではレイブ・シード・rape-seeds)とよばれる)の花、白いそばの花などで満たされ、その中を、文字通り地平線に消え入るまでまっすぐな直線線をもつたハイウェイがよぎっている。どちらを向いても地平線——つまり三百六十度の地平線を見ながら車をドライブする快感、あるいは捲意(?)を味わうことも可能である。「天」と「地」の実感が圧倒的にそこにはある。このプレーリーの空の夕焼けがまた素晴らしい。西の空だけではない。全天が焼けるのである。全天が燃えるのである。あかね色に燃えた雲たちは、立原道造が詩ったように「ふとあおざめて死」んだりはしない。鋭く澄み切った青さの空を、地平線の近くにのぞかせながら荘重な原始の蒼黒色にゆっくりと色を変えて行く。大空一杯の沈黙の大シンフォニーの幕は、悠容としておろされるのである。

この北国の空は、ときたまオーロラ(北極光)の大カーテンがゆれかがやく舞台にもなる。真夜中の空高く美しいオーロ

ラを見つけると、すぐに親しい友人たちに電話で知らせることが、こちらの日本人の間で行われたりもする。ぐつすりとなむり込んだ所を電話のベルでおこされて、受話器をとりあげるねほけたふくれっ面が、オーロラと聞いてたちまちうれしい笑顔に変わる。

エドモントンの空のすばらしさをあれこれならべたてる恰好になってしまったが、実は、この空は、何も飛びきり青くすばらしいわけではない。しかし、強調したいのは、エドモントンの空の青さは、私の幼い日々の記憶にあるふるさとの空の青さと同じものだということなのである。流れゆくちぎれ雲のたたままいも、夜空に仰ぐ星の数も、満月の兎の餅つきのあきらかさも、なつかしい昔と変わっていないということなのである。

万葉の昔から、空のたたままいは自然をめぐる日本人の情緒生活にとつて大切なものであった。我々の空がどんなに豊かなものであったかは、私の浅い古典の素養の底をあさってみても、容易にたしかめることができる。

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜きよらけくこそ(万葉集)

大空は恋しき人の形見かは物思ふことにながめらるらむ(古今和歌集)

ながむれば心もつきて星あいの空にみちぬるわがおもいかな(新古今和歌集)

あるいは若山牧水の

しら鳥はかなしからずや空のおお海のおおにもそまずたじよう

これらは誰の心にも親しい歌であろうし、また、カール・ブッセの「山のあなたの空とおく、さいわい住むとひとの……」も上田敏の名訳によって、我々の青春の空への憧憬の切なさそのものであつたはずである。いや、名歌、名句を借りる必要さえもない。ひとそれぞれふるさととの山河、その上にひろがるふるさとの空がどれだけ大切なものであるかを知らぬのに、他人の口を借りる必要はないのである。

しかし、と私は考えこむ。日々の生活の忙しさに追われ、人為的につくりあげた「生活の豊かさ」に目を奪われて、我々は頭上の空がどうなっているか、どうなりつつあるか、あるいはどうなつてしまつたか、気がつかぬままに生きていくのではあるまいか。まやかしの生活の豊かさを手に入れるために、我々は空の青さを手放し、それを忘れてしまおうとしているのではあるまいか。もしそうだとすれば、損失はあまりにも大きく悲しい。

青い空、星いっぱいのは空は、我々人間たちすべてにとつての大切な「神話」であるのかもしれない。その空が失われるとき、我々の内部でも人間のすこやかな存在に欠くことのできないあるものが崩れ去ってしまうのかもしれない。私はエドモントンの空の青さを仰ぎみながら、しきりにそう思うのである。

日系プロジェクト委員会発行

日系カナダ人百年史
千金の夢

多田 正俊

本書は、日系カナダ移民百年祭（一九七七年）を記念して出版された写真集である。縦二十九センチ、横二十二センチで百九十ページ。一八七七年（明治十年）から百年間にわたる日系人の記録写真二百六十八枚（これらは、一昨年の移民百年記念行事のひとつとして、カナダと日本で展示された）が、四つの時代に区分され、収録されている。収録写真の大半は個人所有で、記念撮影が多いが、ほかにプリティッシュ・ユニオン・コロニア大学、トロントの日系文化センターなど公共機関からも集められた、全部で四千枚以上の写真から厳選されたという。英語、日本語、フランス語の表題がつけられているほか、写真説明も、小学生の作文、短歌、日系人の証言録が三カ国語で併記され、時代や当時の状況説明を効果的に盛りあげている。

本書は、日系カナダ移民の歴史を扱った初めての本格的な写真集として、出版そのものが高く評価できる。同様の写真集出版の声は、日系人の間で早くから望まれていたといわれるが、カナダ全土に散った日系人から個人所有の記録写真を入手するのは難作業で、実際に手をつける人がいなかった。それに取り組んだのが、百年祭をきっかけに地道な収集作業を続けた、バンクーバー在住の新移住者、そして二、三世の若いグループ十八人である。三年がかりでやっとトロントの出版社から発行にこぎつけた努力は、大いに買いたい。

本書のうち、記録として価値が高いのは、移住初期とカメラの個人所有が禁止されていた太平洋戦争中の写真だろう。白人にまじつての鉄道敷設作業、あとけなさが残る写真花嫁、日本人排斥運動でこぼれに破られた窓ガラスの建て物などの写真には、移民の汗と涙の証といったものが感じられる。第一次大戦で欧州戦線に出兵した義勇兵の写真は、いまとなつては貴重な資料である。第二次大戦の強制収容所時代の写真はとくに圧巻といえる。この時代の写真二十四枚は、重要な歴史的位置を占めるとみえ、写真のすべてが太いワクで囲まれている。人形を抱いてキャンプに移動する少女、射殺の目印とされた日の丸入りの収容所服を着せられて死者を埋葬するスナップなどは、何回見ても胸に迫るものがある。

全体に日系人の苦難の歩みとカナダへの同化に焦点がおかれ、百年にわたる労

苦、みじめさ、たくましさ、喜び、希望といった日系人の心が凝縮されているように思う。

しかし、難点は、写真と説明文のすべてがセピア調に統一されていることだろう。歴史の芸術的な表現方法と受け取れなくはないが、人間のドラマをつづる写真は、白黒のままの方がより訴える力を持つ。一枚の白黒写真はその扱い方いかんでは、セピア色よりもはるかに迫力があり、われわれをより深く考え込ませる。この点、すべてをセピア調に、しかも大ききも各ページほぼ同一にしたのは、単調さを免れない。時代の区切りにも、もう工夫はしなかった。

（読売新聞大阪本社記者）

No Man Alone, A Neurosurgeon's Life

By Wilder Penfield
(Little, Brown & Co. Ltd.)

世界的な神経外科医で、手術によるてんかん治療法を発見した故ペンフィールド博士の自伝。てんかんが外科手術で治療できることを発見したいきさつ、脳細胞の配置や記憶貯蔵の仕組みを見つけたいきさつなどが、生き生きと描かれている。

Borden: His Life and World

by John English
(McGraw-Hill Ryerson Ltd.)

第一次世界大戦のときカナダの首相をつとめたロバート・ボーデンの伝記。当時、カナダはフランス系住民が徴兵制導

人に猛烈に反対し、カナダはナショナルイズムに熱狂するイギリス系国民と、それに反発するフランス系国民の二つに分裂していた。特にオンタリオ州の保守党政権が公立学校でのフランス語教育を廃しようとしていたこともあって、フランス系国民の怒りは大きかった。現在でも保守党がケベックで不評なのは、当時の政策に一因があるといわれている。

カナダ文献目録

図書館などへ発送



日本語で書かれた単行本、政府刊行物、論文、雑誌記事などをリストアップした「カナダ関係邦語文献目録」は、すでに発行され、その一部が各地の図書館、大学、研究機関などに発送された。

一〇二ページの小冊子で、カナダの社会、経済、政治、日加関係、歴史などに関する本、論文、記事が、著者、標題、発行元、発行年代、ページ数の順序で記載されている。カナダ関係のまとまった文献目録としては、初めてのものである。

前号でお知らせしたように、文献目録は希望者に無料で送付しているので、欲しい方は当広報部宛てハガキで申し込まれたい。

